

ね ぎし かん が い せき ぐん 根岸官衙遺跡群

古代磐城郡の役所と寺院



根岸官衙遺跡群

根岸官衙遺跡群は、古代の郡役所である根岸遺跡と、その関連寺院の夏井廃寺跡からなる国の史跡です。

根岸遺跡（福島県いわき市平下大越字根岸、藤間字トウボウジほか）

奈良・平安時代の陸奥国磐城郡の郡役所跡です。役所の政庁と正倉、豪族居宅、古代集落などが発見されました。

夏井廃寺跡（福島県いわき市平下大越字石田ほか）

根岸遺跡に臨接する古代寺院です。塔・金堂・講堂の主要な建物跡や、溝・土塁などの区画施設が発見されました。これによって、寺院の伽藍配置が明らかとなりました。

「いわき」誕生の地



海から見た根岸官衙遺跡群

自然に恵まれた土地

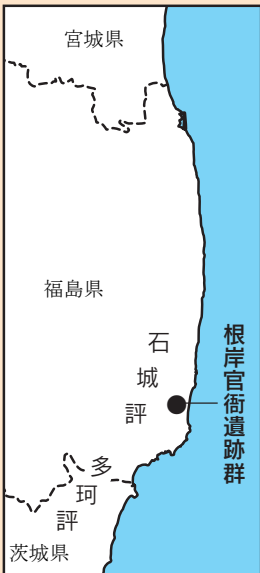
根岸官衙遺跡群の北側には夏井川、南側には滑津川が流れ、これらの川によって作られた広い平野では農業が盛んに行われています。東側には太平洋が広がり、黒潮と親潮がぶつかる潮目の海は豊かな漁場となっています。また、阿武隈山系から延びる丘陵は様々な山の幸をもたらしてくれます。

この川と海と山の自然に恵まれた場所で、古代の役所と寺院のあとが見つかりました。

『いわき』の始まり

今から約千三百年前に書かれた『常陸国風土記』には、「白雉四（六五三）年、多珂国造石城直美夜部と石城評造部志許赤という人が申し出て、助川（茨城県日立市助川あたり）から苦麻村（福島県双葉郡大熊町あたり）まであった多珂国造の国を多珂評と石城評にわけた」と書かれています。

この時に根岸に役所が置かれ、この地が石城と呼ばれました。



石城評と多珂評

最初の発掘調査

夏井廃寺跡は、水田の中に高まりと礎石があり、瓦もたくさん見つかったため、江戸時代から寺院のあとと考えられていました。昭和三十三年には、その高まりが「夏井廃寺塔跡」として福島県指定史跡となりました。

昭和三十九年に旧平市など根岸官衙遺跡群をふくむ地域一帯が新産業都市指定となり、開発で遺跡が壊されてしまう心配が出て来ました。そのため、昭和四十一年に福島県教育委員会によって最初の発掘調査がおこなわれました。



夏井廃寺跡の調査（昭和41年）



● 長者平の伝説 ●

根岸遺跡の周辺は「長者平^{ちやうぜいへい}」という俗称で呼ばれていて、昔長者が住んでいたという伝説があります。

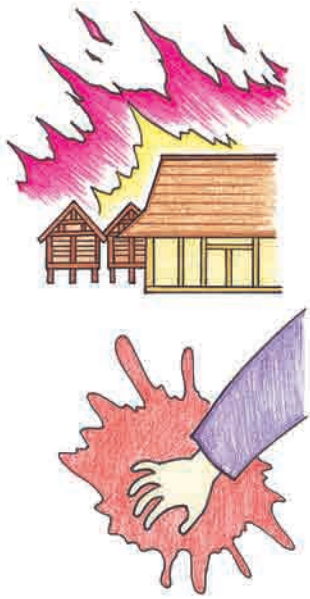
地元の渡邊行郎さんの話

八幡太郎義家が豊間から三和方面へ向かう途中長者平の館に来て一泊し、「明朝までに蓑二百枚・草鞋二百足を作ってくれ」と依頼した。館主は従順にこれを指定の時間までに提出した。ところが、義家側は「短時間にこれ程の品数を整えることのできるのは勢力強大の証拠である。これを後に残して前に進めば追討される危険性が大きい」と判断した。そこで、義家側は去ったふりをして引き返し、館を焼き討ちにした。

当然ながら館主等は殺されたが、一部の者は辛うじて逃げ出して平下神谷字六十枚に身を潜めた。義家によって焼き討ちされたこの時、館は三日三晩焼け続けたという。

だから今でもここで焼米が出るのは長者の米倉があったからだそうです。

「長者伝説」は菊多郡の役所である郡遺跡にも残っています。



倉庫の発見

昭和四十八年、根岸遺跡近くの台地の上で工事をしていた時、古代の倉庫のあとが見つかりました。倉庫のそれぞれの柱は、一辺約二メートル、深さ約一・八メートルの基礎工事をした上に、礎石という土台の石を置いたものでした。この倉庫の発見により、根岸遺跡が古代の役所であることが確実となりました。その後、昭和六十三年に別の場所でも倉庫のあとが発見され、役所の建物は台地全体に広がっていることがわかりました。



倉庫の礎石(上)と柱の基礎(下)
(昭和48年)

範囲確認調査の成果

昭和六〇年代に入って、根岸官衙遺跡群の周辺でもゴルフ場開発の計画が持ち上がりしました。そこで、この貴重な遺跡が開発で壊されてしまわないように、地元の方々のご理解とご協力をいただきながら、遺跡の範囲を確認するための発掘調査が始まりました。

その結果、古代の役所や寺院などの建物のあとや役所に関する遺物など、貴重な資料がた

くさん発見されました。それは、古代の地方の政治がわかる重要な資料として全国的にも注目されました。

国史跡指定へ



現地に立てられている案内板

発掘調査の成果は、毎年説明会を開催して多くの市民の方に見ていただきました。次第に、この貴重な遺跡をいつまでも保存しようという動きが広まり、平成十七年に根岸遺跡と夏井廃寺跡の二つの遺跡を合わせて「根岸官衙遺跡群」として国史跡に指定されました。

根岸官衙遺跡群のここが重要！

- ①郡(評)ができた年代がわかっている。
- ②郡(評)を作った人の名前がわかっている。
- ③役所の主要な建物が見つかった。
- ④役所の主要な建物の移り変わりがわかっている。
- ⑤役所といっしょに寺院が見つかった。
- ⑥役所を作った豪族の屋敷が見つかった。

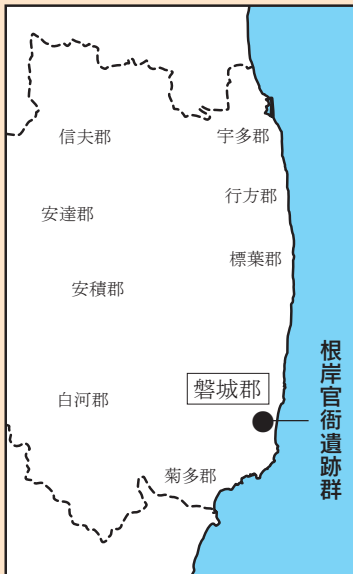
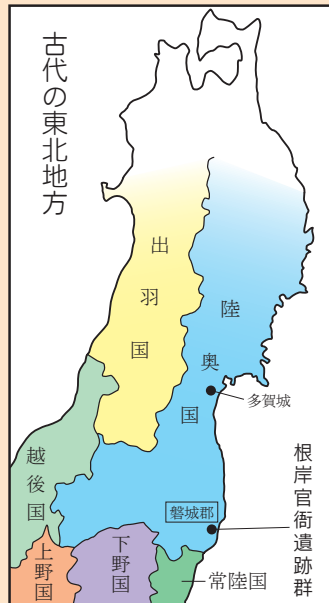


根岸官衙遺跡群とその時代

飛鳥・奈良時代の日本

大化元（六四五）年、「大化の改新」という大きな政治の変化がありました。それまでは各地の豪族がその地方を支配していましたが、改新後は全国を国・評・里に分け、国や評には役所を作り、すべてを中央の大和政権が支配するようになりました。いわき市の大部分は白雉四（六五三）年に石城評となり、陸奥国に含まれました。

大宝元（七〇一）年に大宝律令という法律が定められ、人々はその法律に従って生活するよ



磐城郡と周辺の郡（9世紀頃）

うになりました。この時代のことを「律令時代」とも言います。



石城評から磐城郡へ

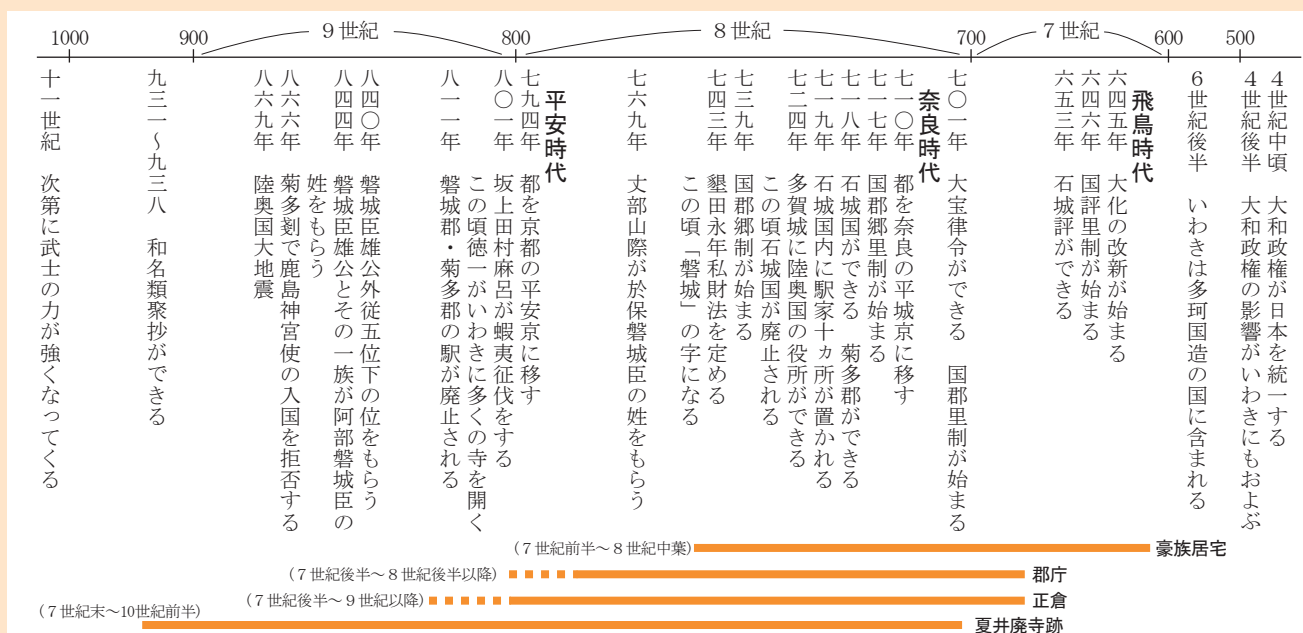
その後、政治の仕組みが何度かわり、大宝元（七〇一）年に評が郡へ、天平十一（七三九）年に里が郷に名前が変わりました。養老二（七二八）年には石城国が作られて石城国石城郡となりますが、すぐに廃止されてまた陸奥国石城郡に戻されています。なお、石城に代わって磐城の字が使われるようになるのは、八世紀の中頃のようなです。

古代の役所の様子

古代の役所には、郡庁・正倉・館（宿舎）・厨（給食施設）などの様々な役割の建物が建っていました。これらの建物は堀や溝などで区画されていることが多かったようです。

根岸遺跡からは、郡庁と正倉が発見されます。郡庁と正倉のある台地に立つと夏井川や太平洋が一望できます。

古代いわきの出来事



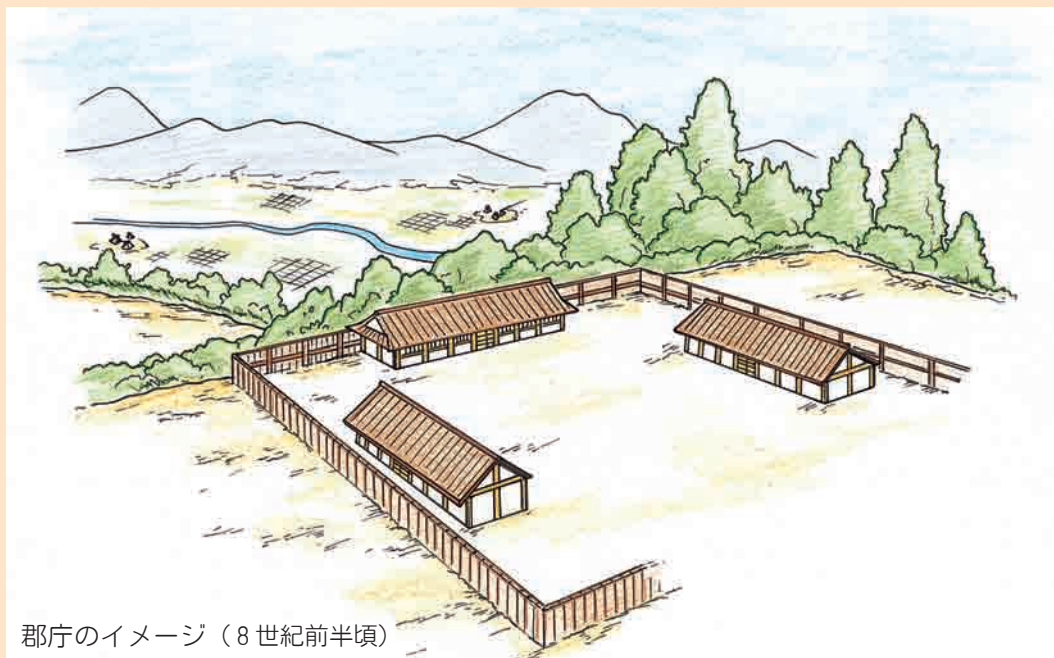
郡庁―郡役所の中心

郡庁は、政治を行う中心の建物です。根岸遺跡では、正殿・東脇殿・西脇殿の三つの建物が中央の広場を囲むように建てられていました。広場は、儀式や客をもてなす時につかわれます。郡庁の建物はどれも掘立柱建物で、屋根は板葺きだったようです。郡庁のまわりは板塀で囲まれていて、その大きさは東西が約六五メートルでした。



郡庁の正殿のあと

最初は、七世紀後半頃に板塀と四方に庇が付いた堂々とした正殿が建てられ、八世紀前半頃には東西の脇殿も建てられて、役所らしい形になりました。その後、ほぼ同じ場所に何度か建て替えられながら八世紀後半頃までは続いていたようですが、九世紀頃にはどこか別の場所に移動してしまいます。



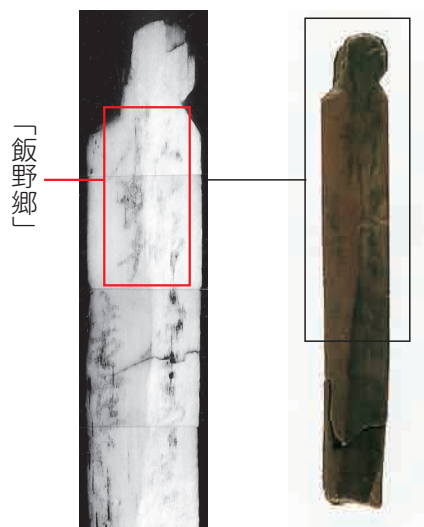
郡庁のイメージ（8世紀前半頃）

郷の名前

国は現在の都道府県、郡は市町村、郷は行政区にあたります。平安時代に書かれた『和名類聚抄』によると、磐城郡内には蒲津・丸部・神城・荒河・和・磐城・飯野・小高・片依・白田・玉造・檜葉の十二の郷がありました。

根岸官衙遺跡群がある地域は、磐城郡磐城郷にあたり、まさしく磐城郡の中心地だったことがわかります。

これらの郷からは、税金の米が役所の正倉に運ばれて来ました。正倉の北群と南群の間の沼地には生活に使われていた道具などがたくさん捨てられていましたが、その中には米を正倉に運んだ時の荷札木簡もありました。荷札木簡は薄い木に墨で文字を書いたものです。左の写真のように、赤外線写真で見ると「飯野郷」の文字が読みとれます。



荷札木簡と赤外線写真



正倉のイメージ（8世紀後半頃）

正倉―米を納める倉庫

大化の改新によって土地はすべて大和政権のものになり、朝廷が人々に田を貸し与えて米を税として集めるようになりました。正倉はその集めた米を納めておく場所です。根岸遺跡では、北群と南群の2カ所に分けて正倉が建てられていました。

正倉は、郡庁と同じく7世紀後半頃から建てられ始めます。最初の頃は掘立柱建物が多かったのが、8世紀後半頃には頑丈な礎石建物に変わります。礎石建物は、さらに地業という基礎工事をしてから建てられていました。

正倉群の間の沼地から見つかった荷札木簡には飯野郷や玉造郷などの郷名が書いてあり、郡内各地から税の米がここに集められたことがわかります。



正倉の礎石



〈参考〉復元された正倉
（提供：福島県埋蔵文化財センター白河館）

豪族居宅―有力者の屋敷

郡庁と同じ台地の上で、7世紀前半から8世紀中頃の豪族の屋敷が見つかりました。屋敷は三回建て替えられていて、徐々に大きな屋敷になっていったことがわかりました。

郡の役人は地元の豪族から採用されたので、この屋敷に住んでいた豪族は磐城郡の偉い役人だったと考えられます。



豪族の屋敷あと



豪族の屋敷のイメージ

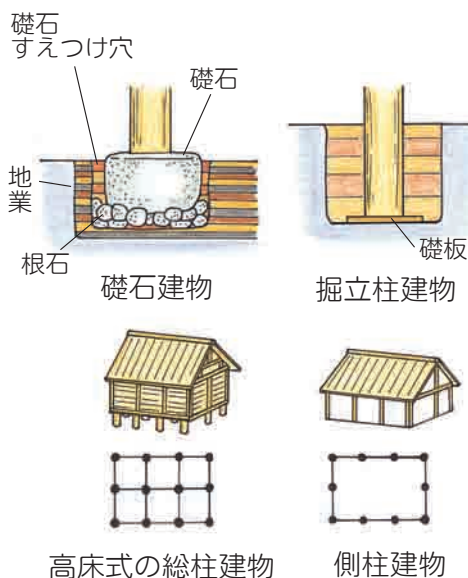
●柱のあれこれ●

建物の柱の建て方には、掘立柱建物と礎石建物があります。掘立柱建物は、地面に穴を掘って柱を直接埋める方法で、古代ではよく使われる方法です。礎石建物は礎石という土台石の上に柱を建てる方法で、重い建物に適しています。

また、建物の柱の並び方には、側柱建（わきばしら）と総柱建（そうちゅう）があります。側柱建物は建物の周囲だけ柱を建てる方法で、総柱建物は床を支える柱がある建物です。総柱建物の方が重さに耐えることができます。

根岸官衙遺跡群では、郡庁や初期の正倉は側柱の掘立柱建物が使われています。豪族の屋敷も掘立柱建物ですが、四面に底が付いています。その後の正倉や夏井廃寺跡の瓦葺きの建物は総柱の礎石建物が使われています。正倉は湿気を避けるため高床式だったと考えられます。

柱をかためた様子





上空から見た夏井廃寺跡



夏井廃寺跡の瓦の文様

夏井廃寺跡から出土した
軒先瓦の文様の拓本
蓮の花を表現しています



塔の基壇と柱の基礎

夏井廃寺跡

六世紀に大陸から日本に仏教が伝わってから、各地に寺院が建立されるようになります。夏井廃寺跡が建立された頃は、仏教で平穏な国を作ろうという考えが広まっていました。そのため、役所の近くに寺院が建てられることも多かったようです。

いわき地方でも、七世紀の終わり頃には夏井廃寺跡の建立が始まりました。廃寺とは、無くなってしまった寺という意味で、寺院の正式な名前がわからないので旧村名をとって「夏井廃寺跡」と呼ばれています。

発掘調査では、溝や土塁などで囲まれた中に塔・金堂・講堂の建物のあとが見つかりました。これらの建物は基壇という土盛りの上に建てられていて、屋根は瓦葺きでした。また、儀式に使う幡を立てるための太い柱も見つかりました。全国でもあまり見つかっていないため、貴重な発見となりました。



〈参考〉多賀廃寺跡模型（提供：東北歴史博物館）

夏井廃寺跡の建物の並び方は、陸奥国の役所の多賀城にある多賀城廃寺跡に似ていると言われています。寺院は十世紀前半頃にすたれてしまったようです。

●夏井廃寺跡の瓦はどこから？●

夏井廃寺跡の屋根瓦の多くは、市内小川町の梅ノ作瓦窯跡で焼かれたものです。瓦は夏井川を利用して運ばれて来ました。その他にも、川を利用して様々なものが役所に運ばれていました。このような水運に適した場所を選んで役所を建てたのでしょう。

磐城郡内の生産遺跡

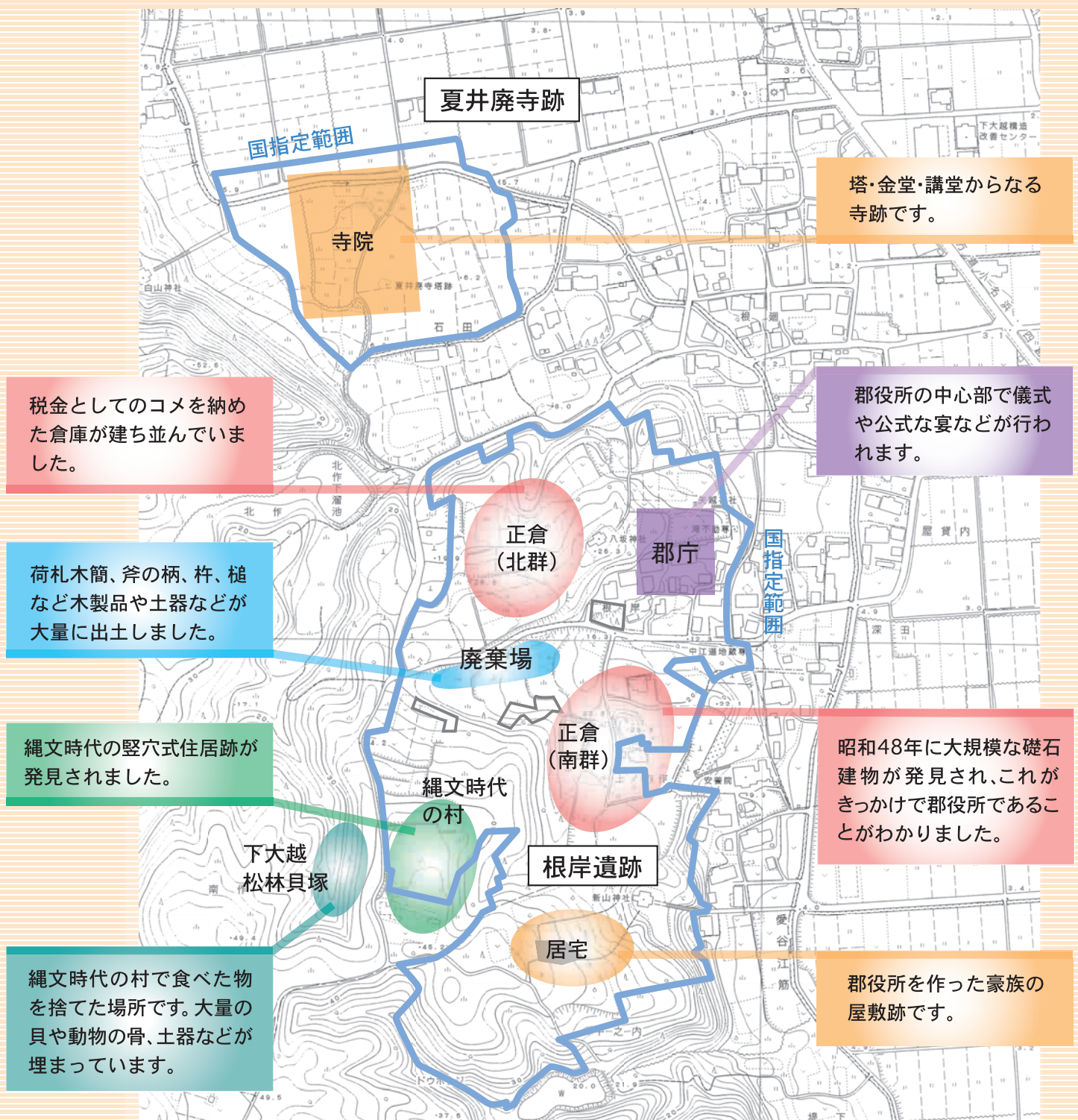
- ①梅ノ作瓦窯跡（瓦作り）
- ②大久保F遺跡（土師器作り）
- ③タタラ山遺跡（製鉄）
- ④大猿田遺跡（木の加工）
- ⑤番匠地遺跡（鍛冶・鋳物）
- ⑥清水遺跡（製鉄）
- ⑦滝ノ作遺跡（製鉄）
- ⑧植田郷B遺跡（鍛冶）



梅ノ作瓦窯跡と瓦



根岸官衙遺跡群 全体図



国史跡 根岸官衙遺跡群

古代磐城郡の役所と寺院

2008年3月28日発行

発行 いわき市教育委員会

福島県いわき市平字堂根町4番地の8

TEL 0246-22-7544

編集 財団法人いわき市教育文化事業団

福島県いわき市常磐藤原町手這50番地の1

TEL 0246-43-0391

(イラスト 猪狩みち子)